

2025 年 12 月 21 日 クリスマス(降誕日)礼拝メッセージ

「クリスマス・プレゼントは誰に」

牛田匡牧師

聖書 創世記 1 章 1-5 節、ヨハネによる福音書 1 章 1-5、9、14、18 節
クリスマスおめでとうございます。

「クリスマス」と言うと、サンタクロースが子どもたちにプレゼントを持ってきてくれる日という印象が強いですが、プレゼントがもらえるのは何も子どもたちだけには限らないようです。あちこちの保育園や施設でもクリスマスの関連行事が行われていますし、町のあちこちでもクリスマスの催しが行われています。私たちの教会が関係している保育園や介護施設でも、先週もクリスマス行事が行われました。子どもたちや施設のご利用者の方々と、またその保護者・ご家族の方々と一緒に、クリスマスに目に見えない神が、人間のイエス・キリストとして、しかも最も小さな赤ちゃんとしてお生まれになったことを礼拝する時間を持ちました。その後、保育園にはサンタクロースがやって来て、子どもたち一人一人にプレゼントを渡してくれました。また介護施設でもご利用者の方々に、プレゼントが届けられ、子どもも大人も大喜びのひと時でした。

プレゼント、贈り物をもらって、悪い気がする人はあまりおられないかと思います。また贈った方も、受け取った方が喜んでくれると、贈り甲斐があると言いますか、嬉しくなるわけです。雑誌『信徒の友』の今月 12 月号には、「アメリカのクリスマス事情」として、多くの人々がプレゼントを贈り合うということが紹介されていました。もちろんアメリカといっても、とても広いので都市部か農村部かという地域差もあるでしょうが、アメリカ全体の統計で見ると一年間の小売業界の総売り上げの 17%がクリスマス・シーズンに売買されているのだそうですし、インターネットを利用したオンラインショッピングに限ると、年間の総売り上げの約 3 割がクリスマス・シーズン期間中の取引なのだそうです。

神様が、イエス様という最高のプレゼントをくださったクリスマスの喜びを、みんなが笑顔で迎えられるように。またイエス様がその言葉と振る舞いをもって、その生涯を通して隣の人たちと、持っている物を分かち合って一緒に歩まれたように、このクリスマスの季節に、私たちも自分に与えられたものや、自分の持っているものを周りにおられる方々と一緒に分かち合っていくことで、喜びの輪が広がっていく。温かい小さな光の輪が広がっていく、クリスマスの時期というのは、そのような

ことを実感できる素敵な季節だと思っています。

ところで、英語の「プレゼント」という言葉には、「贈り物」という意味だけではなく、他にも「現在」という意味もあります。「贈り物」と「現在」とでは、全く異なった意味ですので、何故同じ言葉なのかと不思議に思って、調べてみたら、もともとは「前に(pre-)」「存在する(esse)」というラテン語で、「目の前に在るもの」「あらかじめ用意されたもの」という意味だったのだそうです。そのために、時間としての「現在」の他にも、「目の前にあるものを差し出す」行為としての「贈り物」という意味も出てきた、とのことでした。一方では、受け手の側から考えてみると、「今、この時(現在)」というものも、私たちに与えられたもの(贈られたもの)だとも言えますから、やっぱり「プレゼント」という言葉が、存在や時間、贈り物という両方の意味を持っているのは、なかなか奥が深いことだと思われました。私たちはこの後、午後に予定されているこども園の卒園児さんたちとのクリスマス会の準備のために、おみやげ作りをしますが、プレゼントを通して、子どもたち一人ひとりの掛け替えのない「今」という時が、喜びに満ちたものとなれば嬉しい限りです。

さて、今回は聖書を2ヶ所、ヘブライ語聖書から「創世記」と、新約聖書から「ヨハネによる福音書」を読みました。この二つを並べて、一緒に読んでみるとすぐに気付きますが、「ヨハネによる福音書」の冒頭は、「創世記」の冒頭を真似て、世界の始まり、天地創造の場面を描いているということが分かります。「創世記」の1章には、神はこの世界を6日間で形作られたと記されていますが、その最初は「地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」とあります。「混沌」という状態を、どのように表現してよいのかは難しく、子どもたちに話す時にはよく、「ぐちゃぐちゃ」で「どろどろ」というように表現したりしますが、言語的には脚注にあるように「形がなく、空しい」とも理解することができます。言い換えれば、秩序がない、何を基準にしたらよいかすら分かっていないような状態、目的も定まらず、何にも意味や意義を見出せていない状態であったわけでした。それが「闇」であったわけです。

しかし、神はそこに「光あれ」という言葉で、光を生じさせて、光と闇、昼と夜を創られたと記されています。この後も神は言葉で「〇〇よ、出て来なさい」というように呼び掛けて、世界を創っていきましたから、「ヨハネによる福音書」の冒頭に書かれている「初めに言があった」(1)、「万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった」(3-4)というのは、如何にも神が言語という手段で

世界を形作られたということかと思われるかもしれませんが。ですが、もしそうだとしたら、人間や他の生物が作られる前に、誰が神の発した音声を聞いたのか、そもそも音声を響かせる空気が地球上にはあったのか、神は何語で話されたのか、など細かい疑問が尽きなくなってしまうので、これは「手段」の話ではありません。

「ヨハネによる福音書」の本文自体はギリシア語で執筆されていますが、ヘブライ語を話していた古代ユダヤ人の言語感覚としては、「言（ダバール）」とは「言葉であると同時に、出来事そのもの」でもありました。つまり人々は「神の力が働いているからこそ、その出来事が生じた」と受け止め、考えていたというわけです。ですから、この「ヨハネによる福音書」の冒頭にある「言」は「言である神」「言である方」（本田哲郎訳）そのものとして理解することができます。万物はその方、神の働きによって成った。そしてその中に命があり、光がありました（3-4）。さらに「言である方は、私たちと同じ肉体を持った人間となって、私たちの間に来られました」（14）。それはこれまで誰も見る事が出来なかった神が、見聞き可能な姿となって、私たちが認識できる存在になられたということであり、私たちはその人間となった神の子、イエス・キリストを通して神を知ることができる。神と出会うことができるようになったというわけです。

そして、その光は全ての人を照らす光であり、かつ闇にのみ込まれてしまうことなく、闇の中で確かに輝いているのだとも言われています。世界を創られた神は、「闇は、一切無くなれ」とは言われませんでした。神が闇の中に光を生じさせ、光と闇を分けられたというのは、どちらか一方だけでは存在することができないということでもあります。闇があるからこそ、その中に光の存在があることに気付くことができる。「光は闇の中で輝いている」のです。どんなに闇が深くても、世界が全て闇に閉ざされてしまうことはない。そこには必ず、小さくても光があるということでしょう。

現代の世界を見ても、真っ暗闇で希望なんて全く見えないという時や場所があります。それこそ「この世の地獄」であって、「死んだ方が楽になれる」と言いたくなる時も場所もあるのだろーと思います。終わりの見えない戦争。何度も破られる停戦協定。飢餓。全てが破壊され尽くした戦場や大災害の被災地。病室も手術室もなく、麻酔薬もその他の医薬品もない中で、緊急手術を余儀なくされる人たちがいて、またリスクの高い出産を余儀なくされる人たちがいます。一方では様々なモ

ノに囲まれ、きらびやかな電飾に飾られ、にぎやかな音楽が流れている町の中でも、どこにも自分の居場所がなく孤独を覚えている人たちもいます。家族がいても心が通わず、生きていることに喜びも意義も見出せずにいる人もいます。クリスマスに、人知られず、いや町の人々、親せきや知人からもさげすまれ、追い出され、のけ者にされて、人間の寝泊まりする家屋ではなく、家畜小屋の片隅で、初めての出産を迎えざるを得なかったマリアとヨセフという若い夫婦の痛みと苦しみ、悲しみと不安は、どれほどのものだったのでしょうか。しかし、絶望と悲しみのどん底、真っ暗闇にしか思えないような所でこそ、クリスマスの喜び、神の子の誕生という小さな光が与えられました（ルカによる福音書2章 1-7節）。

金色に輝く天上世界から、救いの糸を垂れる神様を見上げる時、人々は「私を見捨てないでください。私に救いの糸を伸ばしてください」と必死にならざるを得ないかと思えます。しかし、命の神は、闇のない世界に鎮座しますのではなく、暗闇に閉ざされ希望が見えなくなっている中にこそ、共におられる。赤ちゃんという一番小さな姿で共におられ、そしてその身をもって、希望の光が決して闇に飲み込まれてしまわないということを示しておられる。十字架という最も残酷な処刑に遭いながらも、それでも「永遠の命」は絶望には終わらないということ、その復活、死からの引き起こしを通して示された神は、私たちの全ての痛みも苦しみも、共感し、共に担ってくださる方です。「クリスマスに家畜小屋に生まれ、十字架に架けられた私には、あなたの痛みも苦しみも、この身をもって知っている」と言ってくれる神の子イエス・キリストが、隣におられ、支え、そして導いてくださっています。そのプレゼント、目の前に既に差し出されている現実、目を向け、神様からのクリスマスのプレゼントを受け取って行きましょう。

クリスマス・プレゼントは誰に与えられたか。誰のために用意されているか……。それは闇の中に置かれている人たち、痛みの中に置かれている人たち、華やかなクリスマス・シーズンを迎えられない人たち、お洒落に着飾ってお出かけすることのできない人たち、ごちそうもプレゼントも何も用意できない人たち、そのような人たちのためにこそ、イエス様はクリスマスにお生まれになりました。目に見えない神が人となったクリスマス。最も小さな姿で、小さくされている人たちの隣に、確かに来てくださったクリスマス。「私はあなたと共にいる。あなたの人生には意味がある」と言ってくれるイエス様から、温かい灯を受け取った私たちは、今日もここから、その小さな灯を、隣の人へと届けて参ります。